

実践魔術講座
リフォルマティオ

上 卷

靈的啓発篇



秋端 勉

スブ・ウンブラ・アラールム・トゥアールム・イエホヴァ
ー主よ、汝の翼の陰の下でー

献 辞

本書を我が三人の師匠、**Fra. U**、故ウィリアム・グレイ、
そして、トニイ・ウィリスに捧げる。

外陣講義文書

「第1講義文書」
(0 = 0 プロベイショナー)

靈的啓発篇



THE OFFICIAL ORGAN
OF
I.:O.:S.:

PUBLICATION IN CLASSES C~D
IMPRIMATUR: M FRATER I.:O.:S.:

First published in 1986 by I.:O.:S.: private edition (ver.1).
Second published in 1998 by Sekibunsha (ver.4).
Third published in 2005 online versions by I.:O.:S.: (ver.5).
This Edition Fourth, Revised and Expanded in 2013 (ver.6).
All rights reserved. © Tzutom Akibba 1986, 1998, 2005 and 2013

— 目 次 —
(2013年1月改訂)

リフォーマテイオ宣言

まえがき

序 章 魔術の誓言

- 1 魔術の定義
- 2 魔術の歴史
- 3 魔術の学問化
- 4 魔術の原理
- 5 魔術師の心構え
- 6 魔術師の倫理
- 7 魔法名とは
- 8 魔術的ペルソナ
- 9 魔術の誓言

第1章 魔術の言語

- 1 魔術修行を初めるために
- 2 魔術に没頭できる環境作り
- 3 魔術修行の指針とは
- 4 魔術の象徴的言語
- 5 ヘブル語について
- 6 魔法日記の書き方
- 7 注意力の正しい用法
- 8 キムのゲームと記憶術
- 9 逆向き瞑想
- 10 センサリー・アウェアネス
課題瞑想：身体の意識化

第2章 魔術師の位階

- 1 秘儀の伝統に何故位階が必要か
 - 2 エレウシスの秘儀
 - 3 神殿騎士団、メイソン、英国薔薇十字協会と黄金の夜明けの階級
 - 4 貴方が直面する位階と I ∴ O ∴ S ∴ の位階カリキュラム
 - 5 象徴とその利用法について
 - 6 ストレス反応とリラクセーション
 - 7 ブリーフ・リラクセーション法
 - 8 漸進的弛緩法
 - 9 視覚化誘導法
 - 10 自律訓練法
 - 11 センタリングの技法
 - 12 神の座位
- 課題瞑想：氣息の流れ

第3章 カバラ的宇宙観

- 1 何故魔術師はカバラを学ぶか
 - 2 カバラ的宇宙における魔術師の座
 - 3 生命の木と四界
 - 4 カバラの基本経典について
 - 5 呼吸の基礎
 - 6 リズム呼吸
 - 7 位階のサイン
 - 8 日 拝
 - 9 瞑想とは何か
 - 10 サイコドラマ
- 課題瞑想：マントラ瞑想

第4章 小宇宙と大宇宙

- 1 オカルト的解剖学
 - 2 身体と宇宙の照応に関する歴史的考察
 - 3 光体または感覚の球体と生命の木
 - 4 生体磁気
 - 5 視覚化の練習
 - 6 図形応用法
 - 7 魔法鏡とオーラ
 - 8 ゲマトリア
 - 9 フローの応用
- 課題瞑想：視覚的観想

第5章 大天使のイメージ

- 1 天使とは何か
 - 2 カバラ的天使観と魔術の応用
 - 3 テレスマ的イメージ
 - 4 四大照応の大天使の座
 - 5 獅子のカバラ
 - 6 カバラ十字と位階のサイン
 - 7 小五芒星の儀式
 - 8 小五芒星儀式の応用
- 課題瞑想：炎の凝視

第6章 個人的神殿の作成

- 1 神殿とは何か
 - 2 歴史上の神殿
 - 3 魔術結社の神殿
 - 4 アストラルの神殿
 - 5 神殿作業
 - 6 個人的神殿の作成法
 - 7 個人的神殿の聖別法
 - 8 個人的神殿の聖別解除法
 - 9 ノタリコン
- 課題瞑想：薔薇と十字架

第7章 能動的想像力

- 1 魔術の基本原理
 - 2 火薬と雷管
 - 3 魔術原理の探求
 - 4 想像力と創造力
 - 5 メンタル・イメージ
 - 6 アクティブ・イマジネーション
 - 7 睡眠と夢
 - 8 明晰夢
 - 9 夢見
- 課題瞑想：旅立ち

第8章 魔術的意志

- 1 真実の意志
 - 2 観 想
 - 3 魂の暗夜
 - 4 靈魂の城
 - 5 靈 操
 - 6 道行き
 - 7 テムラー
 - 8 天使ガブリエルの翼
- 課題瞑想：3文字の瞑想

第9章 召喚魔術

- 1 何故魔術を学ぶか
 - 2 魔術師に要求される徳目
 - 3 見えないものを見る
 - 4 靈的存在のヒエラルキア
 - 5 召喚と喚起の差異
 - 6 天使存在
 - 7 召喚の技法
 - 8 七の封印
- 課題瞑想：火の文字

第10章 喚起魔術

- 1 魔術師のプロトコール
 - 2 クリポトの世界
 - 3 魔王の座
 - 4 四大の性質
 - 5 四大の意識開発
 - 6 四大の象徴武器
 - 7 喚起魔術
 - 8 諸次元への上昇
- 課題瞑想：無の瞑想

第11章 魔術的意識

- 1 意識と無意識の境界
 - 2 アルテル・エゴ
 - 3 感じる知性
 - 4 内在秩序
 - 5 シャーマンの方法論
 - 6 魔術的意識への変容
 - 7 境界の住人
 - 8 守護者との対話
 - 9 メルカバによる下降
- 課題瞑想：神への祈り

第12章 統合の神秘

- 1 祈りの方向
 - 2 気概念
 - 3 マナの力
 - 4 人体の中枢
 - 5 自分の場所
 - 6 エーテル的呼吸の操作
 - 7 神殿の封印
 - 8 光体の育成
- 課題瞑想：ヤコブの梯子

終章 魔術師への径

- 1 選択肢の提示
 - 2 魔術学習の参考となる書物
 - 3 I :: O :: S :: 入団案内
 - 4 I :: O :: S :: 質問状
- 付録 I :: O :: S :: 団員登録 (別添)

リフォルマティオ宣言

魔術の再生 (Reformatio Magicum)こそ、多年の夢である。

およそ30年の歳月をかけて、英国の魔術師に師事し、幾つかの海外魔術団体と交流しながら、体系的に魔術の学習を行い、魔術の実験を繰り返し、個々の実践内容を検証してきた。特に集団で行う魔術のノウハウは、文献にも明示されておらず、暗中模索の日々であった。一方、ヘルメス学の体系に重要な一角を占めるユダヤ教神秘主義については、古代のヘハロート文書群から、中世の獅子のカバラ (Kabbalath Ha Ari) を経て、実践経験を豊富に継承した現代ハシディズムの伝統まで貪婪に渉猟した。その渦中で実践カバラの深淵を何度も垣間見ることとなった。

卑俗な紛いものではなく、真の魔術を追求する試みにおいて、貴重な同胞たち、I :: O :: S ::の兄弟姉妹たちと出会うこともできた。自分自身でアデプトと名乗るのは些か面映ゆいが、少なくとも、海外の魔術師たちに比肩する《知》と《わざ》を身につけたと確信している。

さて、工業化時代、物量の勝利、戦争の世紀とも呼ばれた20世紀末に、魔術の学院の設立を宣言する『実践魔術講座』刊行から、早くも15年が経過した。

この間、魔術の学院I :: O :: S ::は、団のアストラル神殿を遷移させ、黄金の夜明け111年祭を挙行し、全く新しい形態の魔術儀式を模索していった。

学院の開設以来、数百名の志願者が門を叩き、決して安寧ではない道程を進んでいった。

旧版『実践魔術講座』において端緒を開いた魔術の学問化については、方法論自体が未開拓なため、苦しく孤独な努力を続けることとなった。幸いなことに1990年代末期から、諸外国の大学等の学術機関が一斉に魔術を学問的に把握する試みを行い、一部の研究者たちが魔術の学会さえ立ち上げていた。

ただし、『僧院の魔術』が指向する学問化とは、観察者としてではなく実践者としての学問化である。従って、歴史学、宗教学のサブジャンルとしての体系化は望んでいない。自らも実践者であり、超自然的行為者である魔術師が、実学の魔術を語ることに本旨がある。

われわれは海外の学術機関の活動を参考にしつつ、独自の学問スタイルを切り開いてきた。

本書『実践魔術講座 リフォルマティオ』は、上記の試みを公開するものだ。

旧版の全ての章を見直し、学問的な検証に堪えるように可能な限り脚注を入れ、事実関係を外挿した。しかし、心象風景を観察する内的な分野では、定量的な根拠を示すことは困難である。従って、体験を語り、他の魔術師の実績などと対比させた。また、新たな魔術領域を幾つか開拓した。その結果、旧版からは6割増の分量となっている。

魔術のリフォルマティオを試みるために、是非本書を手にしてもらいたい。

あなたの眼前には、驚嘆すべき宇宙が展開するだろう。

(本頁白紙)

まえがき

このテキストは魔術を志す総ての男と女のために書かれた。

魔術師一。随分と魅惑的な響きをもつ言葉である。魔術師とは、超自然を自由自在に操り、天使や精霊から地下の悪魔とも対話し、それらを思いどおりに操る超人だろうか。或いは、カバラの達人として、宇宙の秘密の深奥を探求し、「神の足跡」(vestigia dei)を測る存在だろうか。現実の魔術師に何ができるかは、おいおい学んで頂くとして、次の問に答えてもらいたい。「あなたは魔術師たることを真剣に欲しているか。」

さて、この書物を手にしたあなたはどんな人物だろうか。頬にまだ赤みの残った学生服姿の少年が、かき集めた小遣いを手に、戦線競々としながら覗きこんでいるのだろうか。初老の上品な紳士が、先月入手した『パヒルの書』の英訳本を思い浮かべながら、セフィロト論に寄与するコメントを探しているかもしれない。外国の魔術結社に属し、万卷の書を猟捕した魔術研究家が、日本の魔術レベルはこの程度かと嘆息しながら、視線を走らせるという構図も考えられる。我々にとって、読者の魔術に関する経験も、知識も、霊的な成長の度合いも全くの未知数なのだ。

従って、あらかじめ断っておこう。本書は、魔術の初心者のための本である。

全くのゼロからスタートする人も、ある程度聞き齧っている人も、本書で何かを掴んで行くだろう。おそらく、英語の魔術書を読み始め、魔術師らしくなってきたあなたも、儀式の細部や、実践の方法が理解できずに苦しんだ経験がおありだろう。

これまでの解説書は、魔術の実践者の立場で分かりやすく書かれたものが少ない。殆どは、魔術研究家が資料を集めて書いたものばかりだ。本書はその象徴大系の主要な部分を「黄金の夜明け」団に負っているが、イスラエル・リガルディーの有名な暴露本『黄金の夜明け魔術全書』(江口之隆訳。国書刊行会)のコピー文献ではない。同書を買って眺めている人は多いが、内容を理解し、実践するまでには、大きなハードルが幾つも待ち構えている。故リガルディーの友人であり、長年月、正式の魔術結社で魔術の実践を行った人物は、同書に厳しい評価を下している。「この本は、所詮『《黄金の夜明け》団の教儀の骨組みだけだ」と。⁽¹⁾

さて、魔術を修行したいが、よい道しるべがないと迷っているあなたに、本書は進むべき道を示すだろう。しかし、本書にできるのは道を示すことだけだ。それを選び、歩いていくのは、あなた自身の「意志」に導かれたあなたの足なのだ。

本書は、「魔術の学院」を標榜する魔術団体 I ∴ O ∴ S ∴ の初級者用テキストに手を加えたものである。我々は、長年にわたり魔術の実践と、その教育のノウハウを蓄積してきた。今回、それを公開し、初級の魔術師志願者が、無知ゆえに陥り安い誤解や、畏を回避し、独学である程度の成果が得られるように構成した。しかし、勘違いしないで欲しい。独学だけで、魔術の神髄を極めれるとは思わないことだ。神秘学の魁偉な実践者グルジェフは、世界を牢獄に譬え、その牢獄の囚人である修行者(世界が牢獄であることに気づいた者)は脱獄を試みるだろうと言った。

しかし、脱獄に成功するのは、かつて1度、脱獄に成功した牢獄外の人物の助けが得られた場合に限るとも言っている。この比喩は明らかだ、オカルトの径は平易なものではない。牢獄の壁を破っても、先が岩盤なら何処にも逃れられない。かつて、脱獄したことのある者だけが、その方法を知っている。そのためオカルト学は、師から弟子にと伝えられてきたのだ。

魔術師というと、羊皮紙の手稿写本を読み耽る孤独な老人というイメージがある。だが、現実には若いころから何処かの学院に入り、長い年月を修行に費やしてきた過程が見逃されがちだ。本のなかに隠された鍵を読み取るだけで、生きた大系を習得できる訳がない。特に内面を深く掘り下げる作業に移行したときは、チェック・オフ・リストを片手に魂の道程をさまよう訳にはいかない。必ず、訓練の危険を熟知した師が必要だ。秘教の学問から離れて、心理学の分野を除いても同じことだ。サイコ・セラピーにおけるセラピスト、ワークショップのファシリテーター、アクティヴ・イマジネーションを実践する指導医師は、いずれも過去にその技法を経験した人間であり、安全に

(1) Pat Zalewski, *Z-5 Secret Teachings of the Golden Dawn, Book1 Neophyte Ritual 0=0*, St. Paul : Llewellyn Publications, 1991, p.xi.

後輩を指導する義務を負っている。何故、これらイメージの冒険をする心理学者たちが慎重過ぎるほどクライアントを観察するのか。それは、これらの技法が魔術の技法と相通じる「ディオニュソスの秘儀」に通底しているからだ。人間の魂の深みを覗き、そこから「あるもの」を引き出す高等作業は文句なしに危険なのである。

しかし、ご心配なく。本書は読者の安全を最大限に考慮してある。本書の実践レベルは、ところどころに緩衝材が準備してあり、実践している最中に精神が危機を迎えることはない。

ただし、本書の教程を終了し、次のステップに進むときは状況が異なる。必ず、信用のできるオカルトの結社を探して、その門を叩いて欲しい。本書の内容は「黄金の夜明け」団の訓練と象徴大系に従って構成されている。従って、本書のカリキュラムを全て終わると、殆どの西洋の魔術団体の実践の基礎は押さえているはずだ。「黄金の夜明け」団と派生した幾多の結社については、象徴や、方法論の差異があっても僅かなものだと確信している。あとは、身を託す団体の方法論に慣れ、秘儀参入し、団の集合精神の保護の下に入るとよい。あなたの魔術師としての将来は、開けている。

それでは、今日からあなたが入る未知の世界を少し覗いてみよう。

我々の魔術結社 I : O : S : は、儀式場としてアストラル神殿を擁している。

アストラル・ライトの某座標の壮麗な丘のうえに立つ神殿。団員たちは必要の都度、定められた手順を介してこの白亜の神殿を訪問する。そのための空間座標や、通門手続きの細部を部外者に明かす訳にはいかない。しかし、いずれ君が訪れるかもしれない神殿の門扉を簡単に描写しておこう。

身体を楽にして、目を閉じ、次のイメージを浮かび上がらせなさい。

君は古風な神殿の前庭に立っている。

右手には、「犠牲の祭壇」と呼ばれる矩形の石を数段積み重ねた祭壇があり、その上で犠牲の獣の肉が焼かれている。その燻る熱を感じなさい。

一方、左手には「大洗水盤」が聳えており、冷水を満たした青銅の表面に露の汗をかいている。

その間をまっすぐ行くと神殿の大理石の階段だ。その段はわずかに12段、一気に登りきると狭い間口の扉の前に立つ。そこには人間の背丈の倍以上ある2本の柱が、両開きの青銅の扉を挟んで両側に聳えていた。

柱は右が白く、左が黒い。普通の柱は何かを支えているものだが、これらは神殿の玄関を守護するように空に向かい佇立している。金属製の柱の先端は黒と白の石榴状の金属球が乗っている。青銅の扉には複雑な浮き彫り模様の細工があり、君の入場を拒むかのように堅く閉ざされている。

君はある特別な姿勢をとり、正確な発音を心がけて合言葉を口にした。

門の中央に髪の毛ほどの筋が走る。見る間に巨大な青銅の門扉は音もなく左右に開いた。扉の隙間から神殿の内部の回廊が垣間見える。その様子を見ようと、目を凝らした瞬間、最奥の祭壇のあたりから、爆発的な白光の玉が飛び出し、君の全身を貫いた。

残念ながら君は入場を拒否された。まだ神殿作業を行う資格がないのだ。

神殿に入り高度な魔術作業を行うためには、正しい訓練と団の承認が必要だ。

君はこの長い訓練を第1歩から進める気持ちがありますか。

イエスならば、先に進みなさい。

ノーならば、インスタント魔術を教授してくれる団体の門を叩きたまえ。

さて、では記念すべき第1歩を進めよう。

外陣講義文書

「第1講義文書」 (0 = 0 プロベিশヨナー)

序 章

魔術の誓言

- | | |
|---|---------|
| 1 | 魔術の定義 |
| 2 | 魔術の歴史 |
| 3 | 魔術の学問化 |
| 4 | 魔術の原理 |
| 5 | 魔術師の心構え |
| 6 | 魔術師の倫理 |
| 7 | 魔法名とは |
| 8 | 魔術的ペルソナ |
| 9 | 魔術の誓言 |

**THE OFFICIAL ORGAN
OF
I::O::S::**

**PUBLICATION IN CLASSES C~D
IMPRIMATUR: M FRATER I::O::S::**

First published in 1986 by I::O::S:: private edition (ver.1).

Second published in 1998 by Sekibunsha (ver.4).

Third published in 2005 online versions by I::O::S:: (ver.5).

This Edition Fourth, Revised and Expanded in 2013 (ver.6).

All rights reserved. © Tzutom Akibba 1986, 1998, 2005 and 2013

本書の利用法について

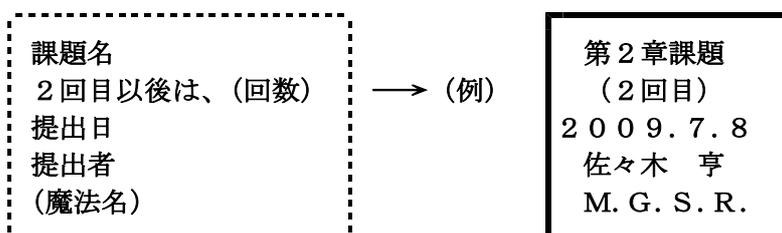
あなたが、これから開始するのはI.O.S.プロベিশョナーの魔術修行である。

碩分社版『実践魔術講座』（第4版）の出版を契機として、I.O.S.のプロベিশョナー一位階は廃止された。この第6版を手にした皆さんひとりひとりがプロベিশョナーであるとも言える。その修行期間は、1年と1か月すなわち、13か月間である。この序章を読み終えたならば、あなた自身の『魔法日記』となるルーズリーフのノートを用意し、どんな魔法名を選ぶかを考えながら、早速第1章にとりかかりなさい。

第1章に、第1か月目の課題の全てが書いてある。第1章の作業総てが終了するまでに、約1か月を要する。その間の魔術記録（魔法日記）の最後の頁に、章末の質問に関する答えを記録しておく。これら全てが終了してから、第2章に取り掛かること。場合によっては、第1章の課題の成果が不本意であり、やり直すことがあるかもしれない。それは、一重にあなたの理解度と実践作業の深さが、自分を満足させるかどうかが基準となる。しかし、徒に何度も同じ場所で足踏みを繰り返して、時間を浪費することのないように。とりあえず13か月で、全ての章を終わらせるのを目標にして頂きたい。

注意すべきことは、何章分かの学習をまとめて片付けてやろうとか、自分の気に入った章から始めようとしなさいことだ。このテキストは、あなたが安全に霊的な発展段階を辿れるように計算された構成となっている。自分勝手に斟酌して、順序を崩せば、あなた自身を害するだろう。

さて、課題には表紙をつけ、必要事項をその表紙に書き込む。魔法日記は、課題と同じサイズの用紙に綴じ込む（豪華な装飾のついた『日記帳』は不要である。）。魔法日記は、本来は手書きが良いが、あなたの霊的指導者に電子メールで送る必要性を考慮すると、パソコンを起動してテキスト化した方が便利であろう。



もちろん、やり直しが多ければ、到底1年では修行を終えることはできないだろう。しかし、最初に努力を傾けた方が良いのだ。この1年は秘教的学問の基礎知識を得ると同時に、あなたの生涯続く魔法修行への習慣を確立することにある。

そして、本書12章の学習を終了した後、あなたがさらに深い魔術学習を望むならば、I.O.S.に入団し、ニオフアイトの団員として活動する機会も得られる。

入団を希望する方は、終章を読んだあと、必要な書類と1年余の魔術記録全てのコピーを、電子メールでI.O.S.に送付して頂きたい（送付先：akibba@mbd.nifty.com）。

ただし、I.O.S.ニオフアイトへの入団は、完全な招待制度であり、不採用通知は原則として送付しない。不親切かもしれないが、ご容赦頂きたい。あなたの健闘を祈る。

なお、学習に不安のある方はI.O.S.サイト (<http://www004.upp.so-net.ne.jp/akibba/>) からプロベিশョナー・スクールに参加する方法もある。

1 魔術の定義

(1) 魔術とテウルギア

あなたはこれから魔術を学ぶ訳だが、魔術とは何か正確に把握しているだろうか。

むろん、分らないから学ぶのだという反論は当然だ。しかし、それについて真剣に考えたことはあるだろうか。いろいろな先人が、魔術を定義しようとしてきた。英語で魔術を Magic という。Magick と書く 1 派もあるが、ここでは古来からの綴りに従おう。この言葉の語源は、ペルシア語のマジである。⁽²⁾ 英語でマジ (Magi) というとキリスト生誕を祝福した東方の三賢者を指す言葉である。ペルシアでは、魔術師=賢者をマゴスと呼び、その複数形がマジであった。それからすると、英語で魔術師をメイガスと呼ぶのはより語源に近い表現だ。

メイガス (Magus) ラテン語 - マゴス (μάγιστος [magos]) ギリシャ語

さて、古典古代には「魔術」を指す言葉は幾つかあった。

魔術の高等な部分は「降神術」(テウルギア) (Θεουργία [Theurgia]) (以下「テウルギア」という。) と呼ばれた。このテウルギアを同じような響きの単語「神学」(Θεολογία [Theologia]) と混同してはいけない。テウルギアとテオロギアは、同じ目標<神との合一>を目指す2種類の道だと言われる。

その違いは何か、グレゴリー・ショウは、次のように図式化した。⁽³⁾

テウルギア=セオン+エルゴン (神の働き)

テオロギア=セオン+ロゴス (神の語り)

古典古代の魔術的認識は非常に広範で、裾野が広い。プラトンは、「ト占術」(マンティケー) は神々と人間との交流 (コイノーニヤ) であると断じた。⁽⁴⁾ また、そのマンティケーという言葉にしても、名前の狂気 (マニアー) に反応する「予言術 (狂気の術)」(マニケー) を語源とし、文字タウを加えてマンティケーとしたのであり、その祖型は「憶測」(オイエーシス)、「洞察」(ヌース) 及び「識見」(ヒストリアー) を組み合わせた「神占術」(オイオノスティケー (オイオーニスティケー)) であるとしている。⁽⁵⁾

ダイモーンの力などを駆使して物質界に変化をもたらす技は「魔術」(マゲイアー) と呼ばれ、墮落した黒い魔術は、「妖術」(ゴエティアー) と呼ばれた。⁽⁶⁾

プラトンはゴエティアーを「神との正式な接触が断たれた場合でも、神を説得しようとする意識的試み」(『法律』) と位置づけ、マゲイアーを「神の諸力」(『アルキピアデス I』) と位置づけた。

(2) ペルシアの魔術的祭儀を執行する僧侶をギリシャ人は「マゴイ」と呼び、かれらの技を「マゲイア」と称した。マゴイは、ササン朝ペルシア時代に祭儀言語とされたペールヴィ語、フズヴァレーシュ語で僧侶を意味するモグ、モグベド又はモグベド等と呼ばれた言葉のギリシャ風転訛である (アルフレッド・モーリー『魔術と占星術』白水社、1978年、32、288頁。)

(3) Gregory Shaw, *Theurgy and the Soul*, University Park : The Pennsylvania State University Press, 1995, p.5.

(4) プラトン『饗宴』(13) 岩波書店 (岩波文庫)、1952年、75頁。

(5) プラトン『パイドロス』(244cd) 岩波書店 (岩波文庫)、1967年、53、54頁。

(6) Robert K. Ritner, "The Religious, Social, and Legal Parameters of Traditional Egyptian magic," in *ANCIENT MAGIC AND RITUAL POWER*, Leiden: E.J.Brill,1995, pp.44f.

テウルギア (theurgia) 後期ラテン語—ギリシャ語 (θεουργία [theurgia])
 テオス (θεός [theos] god (or θεά [thea] goddess)) + エルゴン (ἔργον [ergon] work)
 テオロギア (θεολογία [theologia] theology)
 ゴエティアー (γοητεία [goeteia]) . . . 吼える (γοᾶν [goan])

テウルギアという言葉が生まれた2世紀の後半において、マゴスやゴエースと呼ばれる存在は、一部の魔術パピルスに見られるように、本来の教えからは離れて、退化した霊的知識の残滓を切り売りする呪術師に墮した者が多かったのである。かれらは商売として霊的な知識を弄んでいた。⁽⁷⁾

ユリアノス父子は、この風潮を打破し、旧態然とした魔術や妖術と決別すべく、『カルデア神託』を著し、テウルギアという新語を創造したのだ。その後、多くの哲学者たちは、このテウルギアなる新概念に魅せられた。魔術や妖術に手を染めるのは気が進まないが、神聖なる作業は行いたい。霊智を獲得したいと思うのが、プラトン以来の哲学の伝統に忠実な者たちの願いであった。かれらにとって、聖なる技であるテウルギアは手垢の付かない学問であった。

技術面だけを見るならば、テウルギアと、マゲイアーやゴエティアーとの差違は決定的なものではない。問題点は精神面にあったのだ。フランツ・キュモンによるテウルギアに対する定義がそれを端的に言い表している。

「畏敬に値する形態の魔術、光明化された種類の妖術」⁽⁸⁾

テウルギアは、ネオプラトニズム的な秘教的宇宙観に裏付けられた神聖魔術である。

マゲイアーは、本来は自然の理法を習得した魔術である。カバラの理解を背景とした、この学問は自然魔術、占星術、神占術、錬金術などを含む多彩な分野である。

ゴエティアーは、ギリシャ・エジプト起源のパピルス文書から派生した。これは殆どが神聖文字や、エジプト神話学への知識がないヘレニズムの魔術師が筆記した文書である。だが、この伝統から魔術の「野蛮な名前」^{ヘルムス・パリス}即ち「異言」^{ゴエティアー}と魔術的意識の関係が明確になり、「生まれざる」者の儀式を生んだ。

どのレベルの魔術も、本来は不可思議をなす賢者のものだった。程度の差こそあれ、市井の民の知り得ない知識を占有した者たちだった。

(2) 先人の定義

魔術の知識とは何か、神の知識、悪魔の知識であろうか。

ここで先人の定義を借用しよう。

魔術の中興の祖と呼ばれるフランスの先賢エリファス・レヴィの定義は次のとおり。

「魔術とは、賢者の時代から伝承されてきた自然の秘密を扱う伝統的学問である」

黄金の夜明け団の首領であるマグレガー・マサーズも同様に、

「魔術とは、自然の秘密の諸力を制御する学問である」と語った。

その後、いろいろな人が定義を試みた。最初はマサーズの弟子となり、後には公然の敵となったアレクスター・クロウリーは、興味深い定義を行っている。

(7) 古代ギリシャにおいてゴエースは未開時代の呪術師の直系の後継者であり、その名前は神々を呼び出すために彼らが発する騒々しい不吉な叫び声に由来している（モーリー、前掲書、43頁。）。

(8) Franz Cumont, *Lux Perpetua*, Paris : P. Geuthner, 1949, p.362.

「魔術とは、主体の意志のままに変化を引き起こす科学、技術である」⁽⁹⁾

それを受け、ダイアン・フォーチュンは、定義の意味範囲をやや限定した。
「魔術とは、意志のままに意識に変化を起こす術である」⁽¹⁰⁾

これは言葉の遊びではない。心理学を学んだフォーチュンの深い実践体験からくる確信である。意識という言葉を広い意味で解釈し、原始的・動物的超能力を起動するその赤外領域から、超人の覚醒意識に代表される紫外領域までの広範な意識スペクトルの総体として捕えるなら、フォーチュンの定義は正しい。心理学者の言う潜在意識や、無意識もこの広義の意識のなかに包容されるのである。

わたしの尊敬する師家（私の師匠の師匠）W. E. バトラーは魔術についてこう語る。
「あらゆる魔術の基本的な目標は、人間の意志を自然や人間や超感覚的な世界に押し付けて、それを征服しようとするところにある」

(3) I :: O :: S :: の考え方

前項は、真剣に検討してしかるべき内容である。

しかし、次のような疑問が沸き上がるのは、当然であろう。

「古人の定義ばかり羅列しても意味はないのではないか。

わたしは、学者ではなく、実践する魔術師になりたいのだ。

I :: O :: S :: は、魔術の実践団体として、魔術をどのように定義しているのか」

ここに新たな正式の定義を加えるつもりはない。しかし、われわれは魔術こそ西欧の秘教的学問の最終形態だと考えている。魔術という言葉が不快であれば、ヘルメス学と言い換えても良い。そして、それは象牙の塔の世界ではなく、実践することで証明される活動の学問である。

魔術思想を学問的に止揚するためには、理論 (theoria) と実践 (praxis) の双方に強い魔術師を育成する必要がある。理論化のない学問は無意味であり、理論倒れでは実践的学問としての価値はない。そのため、再現性のある熟練した実践者が必要とされる。

魔術の根幹にあるのは個人の内的体験である。従って、一般化するのは非常に困難だ。しかし、個々の魔術的現象ごとに異なるのでは理論化はできない。各現象を包括的に記述できる背後の力学を発見するのが肝要である。秘教の学問大系では、色々なシステムが紹介されてきた。

有名などころでは、タンナイム期の古代ユダヤ神秘主義者の意見の相克がある。

旧約聖書の『出エジプト記』20章18には「すべての民は声と炎を見ていた。」とある。この「声を見た (אֵת הַקּוֹל וְאֵת הָאֵשׁ) 」という部分について、神秘家ラビ・アキバと学友ラビ・イシュマエルの解釈が異なった。イシュマエルは、理論的、合理的に比喻であろうと解釈した。しかし、アキバは文字通り、イスラエルの民は「炎のような神の声」を見たときと神秘主義的な解釈をした。かれは超自然的なものに触れたとき、人間の感覚が感乱するのを体験として知っていた。われわれは音を見て、光を聞き、痛みを嗅ぎ、甘みに触れ、死を味わう感覚を束ねる必要がある。

新時代のカバリストの霊的義務については後に語るが、魔術的知識を実践する魔術師は、人類に奉仕する義務を負うことを知らねばならない。

それ故に、魔術と魔術師の関わりを示す公式は、次のとおりである。

(9) アレイスター・クロウリー『魔術—理論と実践』上、国書刊行会、1983年、19頁。

(10) W. E. バトラー『魔法入門』角川書店（角川文庫）、1974年、14頁。

魔術 (MAGICUS) = 知 識 (SAPIENTIA) + 実 践 (ARS)



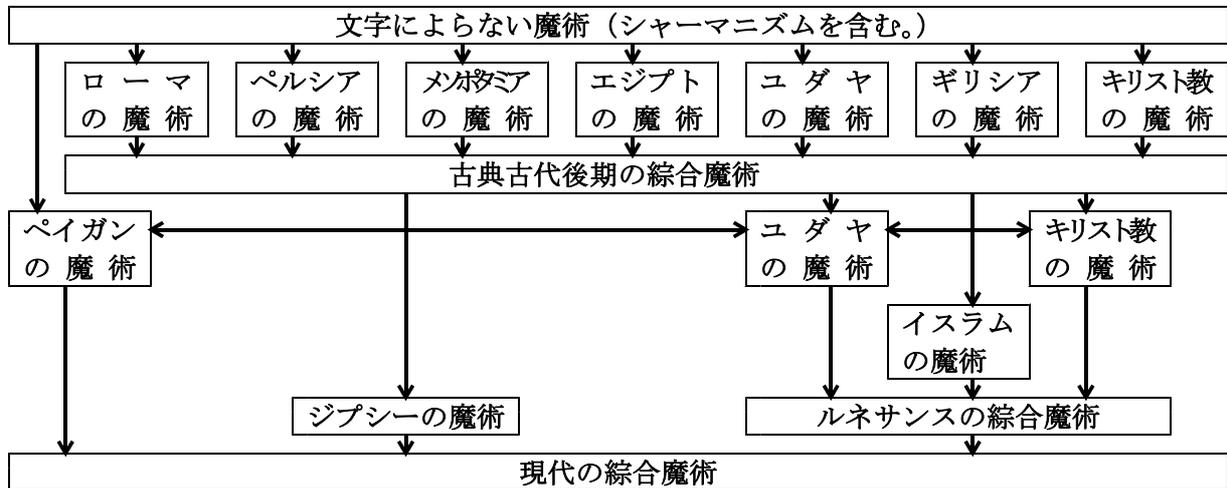
勿論、これが絶対不変の、または正当な公式、図式だというつもりはない。

これが魔術の公式だと言えるものを提示しても、年月とともに変化し、或いは内容に深みを加えることがなければ、遠からず形骸化する。そのためには、不断の魔術研究が必要である。古代ユダヤのメルカバ神秘主義が良い例であろう。20世紀の中頃から見直しが始まり、文献解題とともに、新しい「戦車のわざ」の実践が模索された。

魔術と魔術師（今は未だ魔術師の卵だが）との関わりは、あなた自身が知識の習得と実践の反復を通して、その意味を掴み取らねばならない。

2 魔術の歴史

魔術の歴史を概観するためには、自分で関連する歴史的事実や、主要な魔術師、影響力の強い文献の成立年代などを年表化してみるのが一番である。この作業はあくまで自分自身で行わねばならない。しかし、ゼロから始めるのも難しいと思うので、米国ブラウン大学で教鞭を取っていたマシーセン教授元教授が作成した西洋魔術の発展系列を一例として示す。⁽¹¹⁾



マシーセン教授は、複数の軸による「西洋」側の視点を提供した。しかし、この図はヨーロッパからの視点で描かれている。

歴史を少し拡大した視野から鳥瞰すると、11世紀続いたペルシア帝国を新興イスラームの戦力が押しつぶして以来、イスラーム・アラブが建設した巨大な国際商業ネットが成立した。この通商圏を介して、上記にはない「インドの魔術」や「中国の魔術」も少しずつ中東経由西洋へも伝播してきた。

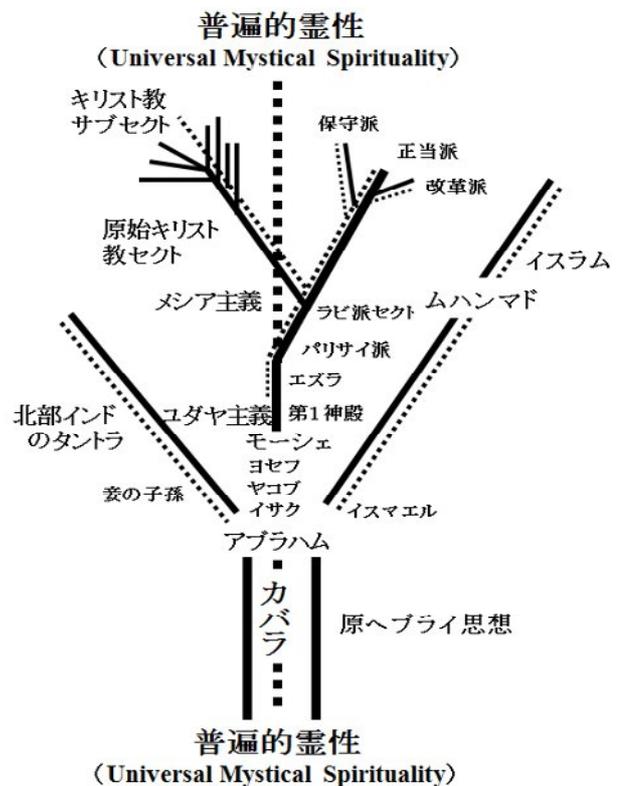
右図は、ユダヤ神秘主義の研究者による普遍的靈性 (Universal Mystical Spirituality) の系譜樹である。インド思想がカバラの体系に引き込まれているのに着目されたい。⁽¹²⁾

われわれが視点、或いは主軸をどこに置かかで、この種の図表は大きく変化する。従って、自分で作成するのが大切なのだ。

なお、マシーセン教授は次頁に示す歴史展望を同時に示している。思想史は背景となる時代を捕らえねば完全には解明できない。

反歴史 (ahistorical) の思想もあり得るが、その発信者である思想家 (著述家) は時代の頸木から自由ではない。

魔術史を把握するためには、明解な歴史観が確立されている必要がある。たとえば、「中世の魔術」という言葉ひとつでも、西洋中世の定



(11) マシーセン (Robert Mathiesen) 教授は、2005年に引退した。

(12) D. H. Feldman, *Qabalah : The Mystical Heritage of the Children of Abraham*, Santa Cruz : Work of the Chariot, 2001, p.29, figure 1.1 Tree of the Children of Abraham.

義の混乱という歴史学の大騒動を知っていると安易には用いられない単語である。

| | |
|---------|---|
| 100 BCE | |
| 前1世紀 | ローマ帝国によるケルト（ブリトン人）征服（54年+） |
| ----- | |
| 後1世紀 | キリスト生誕（伝統的に1年） 大プリニウス『大自然誌』（79年） バビロニアの楔形文字による最後の占星術文献 |
| 100 CE | |
| 2世紀 | ユダヤ人の離散（ディアスポラ）開始（135年） プトレマイオスの占星術的『四書』（テトラビブロス） 『カルデア神託』 |
| 200 CE | |
| 3世紀 | アレクサンドリアのクレメンス（215年頃死去） プロティノス（270年死去） |
| 300 CE | |
| 4世紀 | アルメニアのキリスト教化（300年） イアンブリコス（330年死去）が『エジプトの秘儀について』執筆 キリスト教、ローマ帝国の国教化（380年） 異教信仰の違法化（391年） 東西ローマ帝国の分裂（395年） |
| 400 CE | |
| 5世紀 | 西ローマ帝国へのブリトン人（442年）及びアングロ・サクソン人の侵攻 ネストリウス派（431年）及びカルケドニア派（451年）の分裂（シスマ） エチオピア人（451年?+）及びフランク人（496年+）のキリスト教化 最後の西ローマ皇帝崩御（480年） プロクロス（485年死去） |
| 500 CE | |
| 6世紀 | ユスティニアン皇帝（565年）及びセオドラ皇后（548年） |
| 600 CE | |
| 7世紀 | ムハンマドのメッカからの聖遷（622年）及び死去（633年） イスラームの中東及び北アフリカの制覇（650年） |
| 700 CE | |
| 8世紀 | イスラーム軍のスペイン侵攻（711年） バイキングのブリテン島侵攻（794年+） シャルルマーニュのローマ皇帝戴冠（800年） |
| 800 CE | |
| 9世紀 | モラヴィア、クロアチア、ブルガリアのキリスト教化（863年+） |
| 900 CE | |
| 10世紀 | デンマーク（960年?+）、ポーランド（966年+）、ロシア（988年+）キリスト教化 アイスランドのキリスト教国教化（1000年+） |
| 1000 CE | |
| 11世紀 | ラクヌンガの編纂 カトリックと正教会の分裂（シスマ）（1054年） 英国のノルマン人による征服（1066年） 第1次十字軍 |
| 1100 CE | |
| 12世紀 | アラビア語文献多数のラテン語訳 モンマスのジョフリー『ブリトン列王史』 オックスフォード大学及びパリ大学の設立 |
| 1200 CE | |
| 13世紀 | 第4次十字軍のコンスタンティノーブル略奪（1204年） 『ゾーハル』の編纂（1275年頃） 大アルベルトゥス（1280年死去） |
| 1300 CE | |
| 14世紀 | 聖堂騎士団の迫害（1307年+） 黒死病の蔓延（1348-49年） リトアニアのキリスト教国教化（1387年+） |
| 1400 CE | |
| 15世紀 | ゲーテンベルグの携帯版聖書（1450年頃） コンスタンティノーブル陥落と最後の東ローマ皇帝の崩御（1453年） 『魔女の鉄槌』の出版（1487年） コロンブスのアメリカ大陸発見（1492年） ムスリムとユダヤ人のスペインからの追放（1492年） |
| 1500 CE | |

| | |
|---------|--|
| 16世紀 | プロテスタントとカトリックの分裂 (シスマ) (1520年) アグリッパの『オカルト哲学』出版 (1533年) コペルニクス及びヴェサリウスの主著の出版 (1543年) グレゴリオ暦の紹介 (1582年+) フリーメイソンリーの創造 (1590年頃) |
| 1600 CE | |
| 17世紀 | 『薔薇十字宣言』等 (1614, 1615年) プリマス (現マサチューセッツ, 1620年+) に英国植民地 ヨハンネス・ケルピウスによるペンシルバニアの薔薇十字植民地 (1694年) |
| 1700 CE | |
| 18世紀 | 光明の時代と理神論の勃興 エマヌエル・スウェデンボルグ (1688-1772年) 古代ドルイド教団の創設 |
| 1800 CE | |
| 19世紀 | フランツ・アントン・メスメル (1735-1815年) ピネアス・パーカスト・キンビー (1802-1866年) エリファス・レヴィ (アルフォンス・ルイ・コンスタン、1810-1875年) 心霊主義の始まり (1848年+) エマ・ハーディング・ブリテン (1823-1899年) チャールズ G. リーランド (1824-1903年) パスカル・ピバリー・ランドルフ (1825-1875年) H. P. ブラバッキー (1831-1891年) 神智学協会の創設 (1875年) メリー・ベイカー・エディ『科学と健康』 (1875年) 黄金の夜明け団の創設 (1888年) |
| 1900 CE | |
| 20世紀 | ジェラード B. ガードナー (1884-1964年) ??? |

上表にもあるように、5世紀の西ローマ帝国崩壊後の西欧史は、資料が急速に少なくなるメロヴィング及びカロリング王朝の支配下にある。これが中世研究家の手足を縛る。

20世紀初頭までのゲルマン学派による西欧中世の定義は、「西ローマ帝国の崩壊から、ルネサンスの勃興まで」であった。しかし、1922年にアンリ・ピレンヌが論文「マホメットとシャルルマーニュ」を著し、この常識に意を唱えてから、中世の定義そのものが曖昧になった。⁽¹³⁾

かれの「ピレンヌ・テーゼ」は、資料や推論の各所に問題が多い (problematic) 論文であるとされているが、ピレンヌの提議した「中世の定義の見直し」は今も続いている。⁽¹⁴⁾

それでは、「中世の魔術」という表現は使えないのか。もちろん、そこまで敏感になる必要はない。常識的な歴史学の動向を踏まえる必要はあるが、根拠を示して自説を主張すれば良い。

ピレンヌの論争には巻き込まれずに、魔術史を総括したリン・ソーンダイクは、不朽の金字塔『魔術と経験科学の歴史』(全8巻、1923 - 1958年)の中で次のように語った。

「古典古代、中世期においては、魔術という用語は、厳密には不確かな事例に関わるものだった。疑いもなく経験的な技に留まらず、思想と教義の集合体であり、世界観を体現するものであった。現代の魔術の定義には、魔術を単に儀式と技芸の集積であると見なす性急で、集合的なものが多く、この魔術の思弁的側面は見逃されがちであった。原始人や蛮人においては、行動に思索が伴うことが少ない。しかし、かれらの行動に幾ばくかの想像的、合目的性、理性的思考が加わるまで、かれらは宗教的、科学的、魔術的なものに差異を認めなかったのである。ビーバーはダムを、鳥は巣を、蟻も巣穴を建設するが、かれらは宗教や科学を持たないと同時に、魔術ももたない。魔術は精神状態を含蓄するので、思想史の視点から読み解くことができる。」(第1巻 序文)⁽¹⁵⁾

(13) アンリ・ピレンヌ『ヨーロッパ世界の誕生 - マホメットとシャルルマーニュ』創文社、1960年

(14) 関岡正弘「ピレンヌ・テーゼとヨーロッパ興隆に対する貴金属のインパクト」

(<http://homepage3.nifty.com/sekiokas/Topfile/History/medieval.html>)

(15) Lynn Thorndike, *A History of Magic and Experimental Science : During the First Thirteen Centuries of Our Era, Vol.1*, New York : Columbia University Press, 1923, p.4.

マシーセン教授は、講義用オンライン・パケット（資料集）に、この一文を入れている。ソーンダイクの著作は、古典古代から20世紀までを網羅していたので、中世の定義に拘泥する必要はなかったという背景もある。

リチャード・キークヘーファーの『中世の魔術』には、5世紀以前の「古典古代の魔術」(magic of antiquity)と、6世紀以降15世紀頃までの「中世の魔術」(medieval magic)を分けて記述している。これは割と古典的な手法であり、ゲルマン学派の中世の開始期を西ローマ帝国崩壊(AD476年:最後の皇帝ロムルス・オウガストゥスの廃位)とし、その終期を16、17世紀のルネサンスの勃興とする考え方である。むしろ、前述したように中世の時代幅については異説が多数あるが、それを承知で使うなら定番であると言える。キークヘーファーは、ソーンダイクと同様に魔術を思想史のなかから読み取る姿勢を取っており、この時代の魔術は「中世文化の十字路」とであると結論している。

フリントは、5世紀から論述を開始している。

トーマスは、16、17世紀の英国を調査対象に選んだため中世の魔術という視点からは、やや外れている。

タンバイアは、先行研究の批判という形式で論を展開しているため、少し判りにくいですが、ヘルメス主義の流れという視点から、中世とルネサンス期を一連の動きと捉え、混沌とした魔術的混合物と学問的知見の両方が存在する複雑な時代であると総括している。

これらを受けたマシーセン教授の方法論は、年代に拘泥することなく、魔術史の流れを大きく把握することにある。

3 魔術の学問化

(1) 学問のススメ

これまで十分な説明もなく、魔術を学問として紹介してきた。

学問体系としての魔術は古くて新しい。

先に述べたように、1世紀に勃興したテウルギアという思想は、新進の霊的な学問としてローマ支配下の古典古代の世界に広がった。テウルギアの思想的背景には、『ギリシャ・エジプト魔術パピルス文書』があり、完全なる人間としての「本然の性」、「オソロノフリス」、「アケファロス」の体現を行う。

やがて中世期に入り、「霊と肉の2元論」を掲げた圧迫的なキリスト教文化が西欧の主流となったときにも、依然として古代から継承された魔術の底流は息づいていた。13世紀の『ピカトリクス』(『グハーヤト・アルハナム』のラテン語訳)には、「本然の性」(*natura completa*)を希求する呼び声が収録されている。イスラーム世界において、その意義を解明したのはスワラルディー(シェイク)であった。⁽¹⁶⁾ これは東西ヘルメス哲学に共有された概念であり、ルネサンス期には「定まらない多様な存在」(「人間は、さまざまで、多様で、しかも定まらない本性をもつ動物である。」(*הַיְהוּא שׁוֹנֵי וְכַמָּה טַבְעוֹת בְּעַלְמֵי הַי*)⁽¹⁷⁾とも呼ばれた。

早世したキリスト教カバリストであるピーコ・デッラ・ミランドラ(1463-94年)が、ローマ法皇の異端審問を受ける原因となった『人間の尊厳について』には、魔術の体系化の試みが現れている。

ミランドラは魔術には2通りあると提言した。

一方は、「ダイモネスの業と権威によるもの」いわゆる黒い業である。

しかし、もうひとつは「正しく探求される限り、自然哲学の絶対的完成以外のものではない魔術の諸定理(Magica theoremata)の研究」である。

これを「クサルモシデスとゾロアスターの魔術」とも呼び、クサルモシデスの魔術とは「精神の医術」(*animi medicina*)であり、ゾロアスターの魔術とは「神的なものどもの学問」(*divinorum scientia*)であるとした。⁽¹⁸⁾

この思想はアグリッパ・フォン・ネットスハイムの『オカルト哲学』(1533年)に継承され、パラケルススを始め著名な魔術の碩学たちにも継承されていく。

そして、20世紀後半には、大学等の研究機関において魔術を学問として捕らえる試みが多数なされた。大学における魔術講座の特徴は、宗教学、人類学、民俗学、書誌学、歴史学などの人文社会系の学問領域に「住处」を確保している点である。

宗教学として分析を試みているもの以外は、「教学」として実践者が論ずる二律背反的な悩みに触れたものは少ない。

しかし、市井の魔術研究家が殆ど行わないテキスト批評のトレーニングや、広範な文化史的側面からのアプローチ、何気なく死蔵している魔術の原典のどこに力点があるか(その講座の力点に過ぎないが)が分かり、自己の研究の参考になる場合がある。

ここで、その幾つかを紹介する。

(16) アンリ・コルバン「秘儀伝授譚とイランのヘルメス主義」『エラノスへの招待：回想と資料』(エラノス叢書別巻)平凡社、1995年、184-224頁。

(17) G・ピコ・デッラ・ミランドラ『人間の尊厳について』国文社、1985年、20頁。

(18) ミランドラ、前掲書、59-61頁。

(2) 主な大学の魔術講座

現在、かなりの数の魔術ゼミを行う大学機関等が増えている。その多くはインターネットでシラバスを公開し、場合によっては使用する教材もネット上で開放している。これは魔術関連ゼミに限らず、社会学系の講座の一般的な特徴である。資本主義社会では実績をアピールしないと、お客（学生）も資本（後援者）も来ないからだ。

大学の魔術シラバスを検索するには、**Societas Magica: Syllabus Project**
<http://www.societasmagica.org/> を参照すると早い。代表的な講座を下に紹介する。

a 講座「中世の魔術」(2004年／2005年)

最も充実したゼミは、米国プロヴィデンスのブラウン大学で開講される「中世の魔術」(Magic in middle ages)であった。

講座を担当する名物教授マシーセン (Robert Mathieson) は、古スラブ教会、ロシア史及び中世古文書学並びに中世期の魔術という多方面の講義を担当し、中世の西欧及び東欧における魔術の伝統及び魔術的宗教を主な研究対象としていた。



かれは、1991年から専門のスラブ言語学を放棄して、魔術の講座を二つ開いた。この「中世の魔術」という講座は、文化史、人類学、宗教学、民族学、文献学、科学及び薬学の観点から中世の魔術を検証するものである。講義のトピックには、中世魔術の原典、歴史的発展、形態及び機能、法律論まで含まれる。

オンライン・パケットとしてかなりの資料が公開されていたが、毎週の指定書籍はネット上にはなく、相当の覚悟で購入する必要があった。必要とされる書誌リストも充実している。というか、これだけの数の専門書籍を大学生が買うのはほぼ不可能である。もう古書店でさえ取り扱われていない書籍も多い。クロウリーの本集めの護符が必要と思える。シラバスを見る限り、その講座についていくのは、相当にハードな努力を続けねばならない。

マシーセンと助手は日曜日にも参加随意的の追加ビデオ鑑賞会を開いている。かれらの教育にかける情熱は本物のようだ。ブラウン大学の当該シラバスは次のとおり。

<http://merlin.allegheeny.edu/employee/a/acarr/smsyllabus/mathieson82.html>

b 講座「古代世界の魔術と超自然」(1998年)

米国ニュー・オルレアンのとウレアン大学における講座「古代世界の魔術と超自然」を担当したのは古典学部のバーベット・スタンレイ・スペース準教授で、クラスは火曜日と水曜日の1100～1230であった。この講座も別な意味で学問の厳しさを味あわせてくれる。担当のスペース準教授はまめな人で、各講義の詳細な事前読書リストを作成し、たとえばラックの『アルカナ・ムンディ』の何ページから何ページを読めと指定してある。ラックはハンディな解説書という趣があるが、ファラオネなどは研究書であり、真剣に論文等を読み解く努力が必要である。とウレアン大学の当該シラバスは次のとおり。

<http://www.tulane.edu/~spaeth/magic98/magic98.html>

c 講座「魔術と神秘主義」(2005年)

南インディアナ大学におけるパット・アーカス教授の講座「錬金術、魔術及び神秘学」のシラバスが表示されている。アレクサンダー・ローブ『錬金術と神秘主義』(和訳あり)を必携図書とするほか、課題図書は、プラトン『ティマイオス』、シェイクスピア『あらし』のような和訳されている古典からキークヘーファー『中世の魔術』等の研究書まで8冊であり、無理なく学習できる工夫が凝らされている。

ミシガン州立大学の当該シラバスは次のとおり。

<http://merlin.allegheeny.edu/employee/a/acarr/smsyllabus/aakhus497.html>

4 魔術の原理

あるとき魔術師クロウリーの遺産管理者で、クロウリーを否定的に評価していたジョン・サイモンズが強烈な毒を吐いたことがある。「魔術のいけないところはただひとつ、それが実効を發しないことだ」随分とシニカルで毒のある台詞だ。かれはクロウリーを憎悪していた節があるので、この発言も割引いて聞く必要がある。所詮、かれは訓練を受けた魔術師ではないからだ。

逆にわたしは宣言しよう「ある条件下では正しい手順で行われた魔術は必ず成功する」と。前項でぼんやりと理解できたと思うが、魔術的变化のアウトプットは術者の意識に現れる。その意味はおいおい理解いただけるだろう。ここで、フランシス・キングとスティーブン・スキナーが呈示した魔術の四大原理を紹介しておこう。

- 1 科学者の捕らえた物質的宇宙は一部分に過ぎず、現実全体の最重要部分でさえない。
- 2 人間の意志力は実在の力であり、訓練することも集中させることもできる。
それによって、環境を変えたり、超常的な効果を引き出すこともできる。
- 3 意志力を導くものは想像力である。
- 4 宇宙は偶然的な要素や雑多な影響力の集合体ではなく、秩序ある万物照応の体系である。
その照応の構図を理解すれば、オカルティストは善悪を問わず、生成した力を利用できる。

この四原理の中には、古来魔術の仕組みとして言及されてきた多くの概念が結合されている。

第1の原理、科学者の語る物質宇宙が、真の宇宙全体の比較的重要な部分に過ぎないという見方はどの秘教の体系でも語られている。我々の宇宙が多重構造をなし、物質界と融合して、しかも目に見えない高次の存在界があることはカバラのみならず色々な民族の神話で語られてきた。わたしは、ここで「界」という単語を使ったが、魔術で *Astral Plane* と言うときの *Plane* が「界」である。そして、多くの進化した生命体は複数の界に所属する「体」を持っている。肉体、エーテル体、アストラル体などと呼ぶときの「体」である。生命そのものが複合存在であり、幾つかの「界」に重複して存在するのである。人間の魂のうち最も高度に進化した部分はエキダーと呼ばれ、まさしく神そのものの分霊、いわゆる「神聖の火花」である。

第2の原理は、意志力の機能について述べている。人間の意志力とは、獸的な欲望を指すのではなく「コクマーの意志」つまり、精神の最も高い鍵盤から弾き出される高次元の意志のことである。アレイスター・クロウリーは、このことに早くから気づいていた。かれは人間の真の意志こそ重要であると考え、「汝の意志するところを行えこそ法の全てである」という有名な格言を残した。従って、意志薄弱な魔術師などは存在しない。魔術師と霊媒などの受動的なオカルティストを隔てる最大の特徴は、この真の意志を持っているかないかである。意志の機能については第8章でさらに詳しく述べる。

第3の原理は、想像力との関連について述べている。クロウリーの元の師であったマグレガー・マサースは、「魔術を行うには意志と想像力の両方が活動しなければならない」と言った。想像力がイメージを作り、その明確化された形象を意志が確固たる流れとして目標に導くのである。この場合の想像力は、パラケルススがいみじくも指摘したように、「空^{フアンタシオ}想」という弱い受動的な心の遊びではなく、明確なイメージを創造する能動的な作業、「想^{イマギナチオ}像」である。想像力と創造力の関連についても、第7章で詳しく述べる。

第4の原理は、万物照応について述べている。これは『エメラルド・タブレット』に書き表されたヘルメス・トリスメギストスの格言、「上なるものは下なるもののごとく、下なるものは上なるもののごとし」に端的に言い表される魔術の基本原理である。この宇宙は複雑に絡み合った蜘蛛の巣のようなものであり、地上で成されたことは星空にも反映するし、逆に星の配置が地上の動向を左右する。地上の事物同志も、その固有の特性が一致するものは相互に支配力を及ぼしあう。魔術師の感覚の球体は宇宙の像を映しており、その像を変化させると外界にも同じ影響力が及ぶという思想である。

5 魔術師の心構え

先ず第一に、「いかなる魔術も、日常生活を放棄する理由にならない」ということを理解してもらいたい。修行のため、大学受検を諦めたとか、家族に負担を強いるということは避けてもらいたい。これからの長い人生を魔術一色に塗り潰すのは得策ではない。マサースやアレイスター・クロウリーのように、生涯を魔術の中で過ごした人物は確かに存在する。しかし、彼らは一様に不幸な人間関係に苦しめられた。

まして、かれら達人級の才能を持たない者が「半年間の魔術的引退をする」と言って仕事をやめ、魔術三昧の道楽生活を始めたらどうなるだろう。家族を不幸にし、かつ、なんら霊性の向上を見なかったら、悲劇そのものと言えるだろう。

従って、諸君は日常生活と魔術訓練の調和を図らねばならない。初期の訓練は1日に30分の時間を見付ければ良い。長く、辛抱強く続けた人間が成果を得るだろう。

そして、訓練はなるべく毎日の一定の時間帯に続けた方が良い。

高名なユダヤ人カバリストであるブラ斯拉フのラビ・ナフマンは言う。

「やる気が全く起こらないときがあるかもしれない。そのときは、気持を奮い立たせて何としても続けることだ。最初は無理やり絞り出したやる気であっても、結局は本物になるものだ。」⁽¹⁹⁾

そして、本人の生活パターンにより、一日のうちどの時間帯に実践しようと構わないと言いつつも、特に霊的伝導力に優れた時間帯は、早朝の起床してすぐか、深夜に少し眠ったあとであると述べている。

ただし、再度、注意喚起するが、その時間帯にこだわるあまり、やらないよりは、やった方が良い。

次に、「人間は前進を止めた瞬間から、後退し始める」というベネディクト修道会の言葉を噛みしめてもらいたい。グルジェフは、同じ言葉を「進化をやめた者が留まることはない、ただ退化し続けるだけだ」と言った。

諸君はこれから単調な訓練を続けることになる。「今日はもうやめよう。明日やれば可いじゃないか」と思った瞬間に、二日分は退歩している。明日になれば、さらに明後日へと訓練を引き伸ばすに違いないからだ。怠慢は、人生のみならず、魔術の習得を妨害するもう一人の自分である。

最後に、I :: O :: S :: の公式宣言のなかから一文を紹介しよう。

「我々は、いわゆる黒い魔術の習得を禁止してはいない。何故なら、ネガティブな力の使用は本人のカルマを黒く塗り潰すだけだからだ。その者は、己から恥じて団の前から姿を消すはめになるだろう」

これは、魔術における右道“Right Hand Path”と左道“Left Hand Path”の統合の可能性を否定するものではない。しかし、その作業は上級者の仕事だと解釈されている。外陣の団にあたる学習を行う諸君は、健全な基礎造りに専念してもらいたい。

(19) E. ホフマン『カバラー心理学』人文書院、2006年、143頁。

6 魔術師の倫理

ここでは前項よりも、さらに難しい問題を扱う。それは魔術師の倫理である。

何故、魔術師に倫理感覚が必要なのであろうか？

もし、魔術師が何らかの集団に属するか、自分の宗教的倫理の枠内に留まることが可能であれば、それが一番安全であろう。しかし、21世紀の魔術師はひとりで活動することが多い。そのかれが魔術的な力が増大したまま、その力の行使について、一切の自己規範をもたないならば、きわめて危険な存在となるであろう。

超常的な力を求めるものは「自我の膨張」(ego-inflation)を引き起こしやすい。無意識の領域を操作すると超常的現象が生起する場合があります、魔術的修行は意識的にその状況を作為するが、「影」の力が目覚めると、この自我膨張も加速する。⁽²⁰⁾自分が周囲の俗人とは異なる特別の人間だと感じるのだ。

個人的に修行している分には、自らを超人、達人であると錯覚し、統合失調症(精神分裂病)へ転げ落ちる危険を犯すだけで済むが、霊的なグループのなかにおいて自我が膨張すると危険である。特にグループの指導者が所謂「グルの病」に取り憑かれると弟子達は悲惨なことになる。最悪の例は、化学兵器テロを実行した某カルト集団である。宗教精神病理学にいう「救世主妄想」に取り憑かれたのである。

これを防止するために、大きな霊的グループは自己規範を設ける。

一例を示すとI・O・Sでは、2001年に霊的指導者の準拠する基準である『霊的指導規約』(CODEX DVCTVS SPILITVALIS)を定めている。これは過去の行き過ぎた指導に対する反省からであり、指導者の心構えとして、人格の交わり、他者の尊重、変容の教育などの指針を示すとともに、規約違反に対する告発と審査の手順まで定めている。

従って、これを読む諸賢人のなかで孤高の個人的魔術の道を極めようとする者は、自らの倫理的規範についても、これを熟成していかなければならない。

(20) 湯浅泰雄「霊性問題の歴史と将来」『スピリチュアリティの現在』人文書院、2003年、25頁。

7 魔法名とは

古への「黄金の夜明け」団の魔術師たちは、自分の趣味のままに自由な「魔法名」(MAGICAL MOTTO)を謳歌していた。ただ、団の中心であるイシス＝ウラニア テンプル No.3では、流石にラテン語で、自らの魔術の目標を標語(モットー)として掲げるというオーソドックスな魔法名が多かった。

例えば、ウエストコット博士の魔法名 Sapere Aude(賢明なる勇氣)、またA. E. ウェイトの魔法名 Sacramentum Regis(神聖なる宇宙)などは、フリーメイソン～薔薇十字的な雰囲気を与えている。

しかし、これがアレイスター・クロウリー派になると混乱の様相を呈する。

例えば、Sorrer 31-666-31 はクロウリーの緋色の女の一人、リア・ハーシグの魔法名である。こうなると、一見ただけでは意味不明のマジカル・モットーが増えてくる。

Fratre Belarion Armilus Al Dajjal Anti-Christ、この「反キリスト者」という凄まじい魔法名は、化学実験中に爆死した強大な魔術師パーソンズのものであるが、何のことだか分かるだろうか。

これから魔法修行を開始するフラター(またはソロール)として、魔法名をつけるにあたり、あなたは次の事に留意しなければならない。

第1に、この魔法名が団の公式の場で世間の名前代わりに使われるということである。チベットの神様の名前を引き出してきて Gu tarah という魔法名を付けたとする。大切な儀式の最中に「フラター・グータラ、前に進みなさい」とハイエロファントが指名することになる。君は若いソロールたちの失笑の中に、祭壇の前に立つことになりかねない。例え、どんなに強力な名前でも、聞こえが悪ければマイナス効果を持つことがある。しかも、魔法名はアストラル・ライトにおける個人認識に使われる記号であるから、一度決めるとたやすく変える訳にはいかない。

また、長い魔法名を付けた場合は、通常、頭文字で略して用いる。もし、誰かが Yet Organized Talumudic Assembling Roll of Unexplanations などという魔法名を付けたとすると、彼はFrater Y. O. T. A. R. O. U. (フラター・ヨタロウ)と呼ばれることになる。

第2に、魔法名は横文字で付けるのが一般的である。ソロール・アマテラスがいても好いとは思わぬが、ラテン語、ヘブル語、エジプト語あたりが使い安い言葉である。なるべく日常的でない言語の方が、響きが良い。英語で付けてミススペルすると、馬鹿にされるだけだ。ヒエログリフならば、文法を気にする必要が殆どない。尚、ラテン語は語尾変化をしっかりと研究しないと、笑われることになるので要注意だ。

第3に、神(神聖名、小神格)、セフィロト、天使の名前などは、基本的には用いないこと。魔術儀式を行うとき混乱するからだ。ソロール・ラファエラや、フラター・オシリスがいた場合の無意味な混沌を想像してみると良い。

同様に、この道で有名な先達と同じ魔法名はつけないことだ。それが最低限の礼儀であろう。同じくマリーヌや、アグリッパを名乗るのも好ましくない。しかし、アレイスター・クロウリーの生まれ変わりだという人物が、フラター・ペルデュラボーを名乗るのを止めはしない。

参考までに、マジカル・モットーはメーソン系の習慣であり、魔女の伝統では「格言」ではなく名前として付けていることを付記しておこう。

8 魔術的ペルソナ

一部で誤解があるようなので、魔法名の内的意味について、さらに解説しておく。

宗教団体などで、出家したときに名前をつけ直すのは、よく知られている。仏教では法名である。某反社会的カルトは、聖名（ホーリー・ネーム）なる怪しげな名前で成員を呼び、世間を騒がせたのは記憶に新しい。

しかし、魔術は基本的には専従の僧侶階級をもたないので、名前を変える訳ではない。普通の日常生活を送っている魔術師が、儀式などのときに特別の仮面を被る。そのときの昇華された別人格の名前が魔法名である。ペルソナという言葉自体が心理学の用語として定着してきたが、魔法名はこの魔術的ペルソナを呼ぶ名前である。

名前自体に、魔力が存在する。かの『カルデア神託』に曰く。「<野蛮なる名前>を変えることなかれ。これらは神よりその民に下されし名前にして、参入の秘儀において口にすべからざる力を有するがゆえなり。」（ウェストコット版155節、マジック版150節 原典はプセルス）これは、神聖名のことだが、自らの魔術的ペルソナを顕わす名前も、それに匹敵するほど神聖である。

名前の働きは、一般に次の三つのレベルで働く。

① 直観的作用

名前の喚起する直接的イメージによる相互作用

② 科学的作用

名前を発音したときの音韻、残響などの及ぼす物理的、形而上学的影響力
書いた名前には、視覚的、呪的影響力も存在する。

③ 占星学的作用

名前を構成する文字と、占星学的影响力の関与。

しかし、個々の作用を独立して取り出すのは意味がない。それらは複合作用だからだ。

まず、最も顕著なものとして、個々の音の力を考えてみよう。

ラテン語で「A s t r a」という名前があるとすると、

これを母音と子音に分解すると、「A - s - t - r - A」になり、母音は「A」が二つ、子音は「s、t、r」の三つである。

一方、日本語のような言語では、「スサノオ」は、「s - U - s - A - n - O - O」で、母音は「U、A、O、O」の四つ、子音は「s、s、n」の三つとなる。

ここで着目すべきは母音群である。多くの言語においては、母音はA E I O Uの五つである。もちろん、それよりも精妙な分類をする言語も多いが、概観するとこの五つに集約できる。そして、五つであることから霊・四大の五元素、東西南北及び天地の軸の五方位に関連づけられることが多い。アンドリュースは、次の分類を提示した。⁽²¹⁾

| 母音 | 元素 | 大天使 | 自然 | 方位 |
|----|------|-------|--------|-----|
| A | エーテル | 救世主 | 全四大霊 | 全方位 |
| E | 風 | ラファエル | シルフ | 東 |
| I | 火 | ミカエル | サラマンダー | 南 |
| O | 水 | ガブリエル | ウンディーネ | 西 |
| U | 地 | アウリエル | グノーム | 北 |

(21) Ted Andrews, *The Magical Name : A Practical Technique for Inner Power*, St.Paul : Llewellyn Publications, 1991, p.14.

ある意味で非常に判りやすい分類法である。しかし、この照応に伝統的裏付けはない。

分類としては、地上の領域における働きを重視したものであるが、占星術的機能を考慮すると、より高次のカバラの概念を導入する必要がある。

アブハム・アブラフィアの『知性の光』から〈母音の門〉の概念を借用すると次の分類が生まれる。⁽²²⁾

| 母音 | 発音記号 | 天の元素 | セフィラ | 方位 |
|----|------|------|---------|------|
| A | カメツ | 風 | ケテル | 北から南 |
| E | ツェレ | 水 | ビナー | 南から北 |
| I | ヒレク | 火 | ネツァク | 下 |
| O | ホレム | 風 | ティファレット | 上 |
| U | シュレク | 風 | イエソド | 東から西 |

その体系は、16世紀にモーゼス・コルドヴェロが次のように再整理した。⁽²³⁾

| | | |
|---------|------|-----------|
| ケテル | カメツ | a |
| コクマー | パタハ | a' |
| ビナー | ツェレ | e |
| ケセド | セゴル | e' |
| ゲブラー | セヴァー | e'' (有音時) |
| ティファレット | ホレム | o |
| ネツァク | ヒレク | i |
| ホド | キブツ | u' |
| イエソド | シュレク | u |
| マルクト | なし | |

従って、魔法名の特性を上記のシステムで解明することができる。

黄金の夜明け団のグラント夫人の魔法名は、「Audeo」であった。

上記の分類では、A-U-d-E-Oであり、I（ヒレク）のみが欠落している。

ならば、この魔法名を用いるとき、ヒレクを利用して補完してやればよい。

魔法名を選択した魔術師は誓言を行うとき、ヒレクの母音の門を開く。

すなわち、ゆっくりと顎を沈みこませながら、ヒレクの韻で下方の無限遠の彼方の引力を誘導する。

「I i i i i i i i i i」

このとき、下方からの引力を感じるとともに、唱える。

「主は、下に向かいて、深さを定めたまえり。」

もちろん、常にこれを行う必要はない。最初に魔術の誓言を行うときだけで良い。

(22) Abraham Abulafia : *A Meditation on the Divine Name from " Light of Intellect " Messina 1285*, Translated by Avi Solomon, Philadelphia, 2010, small booklet.

(23) Moses Cordvero, "Pardes Rimoni" 32Gate, Chap.1-3, in Aryeh Kaplan, *Meditation and Kabbalah*, York Beach : Samuel Weiser, 1985, p.185.

9 魔術の誓言

魔術師は総ての魔術作業に先立って誓言、または宣言を成す。

それは魔法修行を開始しようとする者が、魔法名として知られるペルソナを纏い、しかる後にアストラル界に向かって自らの決意を宣言するものである。儀式的色彩が強いが、ひとりで自らの内面と対峙して行うものである。

そのやり方は千差万別であり、単に「これから小五芒星儀式を行う」という簡単なものであっても良いし、「われこと魔術結社O・Zの第38階級「黒鷲の騎士」にして ORPHIM LODGE No. 125 のPRECEPTOR GENERAL たる FRATER AD STELLARUM VIVENTIUM は、ロッジの兄弟たちの助力を得て、第8天における「神の衣の儀式」を執行すなり」というものでも良い。

誓言の主要な部分は、「誰」が「何」を為すかである。

多くの魔術作業は、儀式魔術と呼ぶ必要のない平明な占いであったり、目的を定めない瞑想の実験であったりする。その場合、個々の作業に先立つ誓言が省略されるのは構わない。しかし、総ての魔術師は魔術結社に入団し、魔術修行を開始するとき団の保護下に「誓言」を為すのである。その場合の名前は、地上のものではなく前項で述べた「魔法名」が用いられる。昇任し、必要に応じて魔法名が変わるときは新たに誓言をやり直す必要がある。それは「永遠なる者」と貴方の本質の間に交えた契約であり、貴方はそれを第2の誓言により取り消すまで、貴方自身の行動を縛る制約、または高次の監督者として受け入れなければならない。「総て光の射すままに進むなり」と誓言した者が、黒魔術の実験をしようとしても十分な成果は得られないだろう。

ある意味では魔法名自体がひとつの誓言たりうる。筆者の外陣における魔法名は「聖なる島の刈手」という意味であり、『ゾーハルの書』に描かれたカバラの先賢たちの行動規範を無意識のうちに強制する。

あなたが魔術を独学するにあたり為すべき誓言は次のようなものであろう。

「われ未だいずれの団体にも所属せぬ『○○○』（魔法名）は、魔術の徑に光明を見い出さんとプロベクションの行を開始するものなり。行の完成を得た後、同じ流派に属する長兄たちの団に参加する権利と義務を有するものなり。我はかのごとく確信し、ここに宣言せり」

この誓言を行うとともに本書の行を開始すれば、貴方は「黄金の夜明け」系の魔術師の世界へ1歩を踏み出すことになる。冷かし半分で、この誓言を行ってはならない。「本当はヨガや仙道をやりたいな」と思いながら誓言してもいけない。誓言は貴方の魂の最も深い部分まで降りていき、そこに意識の回路を開く。前述したように魔術師の誓言は強制力を持つのだ。それは神と貴方自身の本質が結んだ約束だからである。I・O・S方式の誓言については、小五芒星追儼儀式などを学んだ後、次に述べる形式で行うと良い。

(1) 準備

儀式開始の少なくとも1時間前には、儀式場となる部屋を整頓し、清掃しておく。部屋の東西南北の壁に次の方位象徴を十センチ四方程度の白地の紙に書いて貼る。

中央：銀色で、霊のサイン⊙ または、渦巻きのサイン
東：黄色で、風のサイン△ または、宝瓶宮のサイン
南：赤色で、火のサイン△ または、獅子宮のサイン
西：青色で、水のサイン▽ または、天蠍宮のサイン
北：黒色で、地のサイン▽ または、金牛宮のサイン

部屋の中央には、祭壇となる小机を置き、霊のサインを置く。その他の空間は動きやすいよう片付けておく。その後、儀式30分前までに、ひとつまみの塩（粗塩）を浴槽に撒いてから、儀式的沐浴を済ます。そのとき、全身を浴槽の湯に浸すこと。意識を集中して行えば、身体のエーテル的エネルギーを浄化し、霊的感受性を高めることができる。儀式前に自分の法衣に着替える。法衣がなければ、清潔で身体を圧迫しない衣服に着替える。裸体は望ましくない。椅

子に座って四拍呼吸をする。呼吸に合わせ、両手の親指で、1～人差し指、2～中指、3～薬指、4～小指の順に4本の指の先に触れる。これを繰り返しながら、心の内部を静かに保つ。

(2) 魔法名の宣言

四拍呼吸をやめ、部屋の中央にたつ。

小五芒星の追儺儀式を行う。

祭壇の西側で東に面して、右手を頭より少し上に上げ、掌を前に向け言う。

「われ_____（下線部は魔法名を完全な形で言う。）は、ここに誓言をなさん。」

まず、頭を下げ、祭壇の上の霊の象徴を視たあと、静かに頭を上に向け宣言する。

「霊の象徴の前にホレムの門を開かん。」

天井を向いたまま、思念を上空遙か彼方の別平面に集中し、ホレムの韻を低く小さく、そして徐々に高く、大きく響かせていく。

「Ooooooooooooo・・・」

無限の彼方において、何かが感応し、あなたに向かって巨大な引力が発生する。DCは、ホレム韻を続けながら首を徐々に下げ、それとともに引力は感知できるほど強くなり、身体を上方に引き寄せる。それは、あなたと上方の宇宙の一角に存在する磁石が引き合うごとくであった。あなたは祭壇の上の霊のサインを視る。

「主は、上に向かいて、高さを定めたまえり。」

次に、一度、左側の地の象徴を視て、視線を正面の東に戻し言う。

「地の象徴の前にカメツの門を開かん。」

東を向いたまま、首を水平に左に動かし、カメツの韻を唱える。

「Aaaaaaaa・・・」

強い誘因力が左側、つまり、北側の宇宙に発生する。その引力をたぐり寄せるように、カメツの韻を唱え続け、首を左から中心に、そして右側へ平行移動させる。北方からの引力で、身体が左に引き寄せられた。静かに首を元に戻し韻律の詠唱をやめる。

あなたは左手を水平に伸ばし、揃えた指先で地の象徴を指し言う。

「主は、北から南に定めたまえり。」

次に、一度、右側の火の象徴を視て、視線を正面の東に戻し言う。

「火の象徴の前にツェレの門を開かん。」

東を向いたまま、首を水平に右に動かし、ツェレの韻を唱える。そして、南の宇宙から巨大な引力を召喚し、ツェレの韻を続けながら左へたぐりよせる。

「Eeeeeeeee・・・」

南北の重力の軸が形成される。カメツとツェレの韻が召喚した引力が均衡した。

あなたは右手を水平に伸ばし、揃えた指先で火の象徴を指し言う。

「主は、南から北に定めたまえり。」

次に、一度、前方の風の象徴を視て、言う。

「風の象徴の前にシュレクの門を開かん。」

シュレクの韻を用いて、前方、つまり東の宇宙から引力を召喚する。首をほぼ水平にしたまま前方に突きだし、ゆっくりと引く。

「Uuuuuuuuu・・・」

音の高まりとともに東方からの強い引力を感じる。

シュレクの韻を高く大きく唱え続ける。そのピッチの上昇とともに、引力が益々増大する。あなたは両手を水平に伸ばし、揃えた指先で風の象徴を指し言う。

「主は、東から西に定めたまえり。」

最後に、祭壇の象徴を再度視て、言う。

「霊の象徴の前にヒレクの門を開かん。」

ヒレクの韻を唱える。ゆっくりと顎を沈みこませながら、ヒレクの韻で下方の無限遠の彼方の引力を誘導する。

「I i i i i i i i i i」

ホレムの韻が召喚した上方からの引力とヒレクの韻が召喚した下方からの引力が均衡した。あなたを軸として、垂直の重力の柱が形成された。

あなたは両手を霊の象徴の上にあて、揃えた指先で象徴に触れて言う。

「主は、下に向かいて、深さを定めたまえり。」

今や、前方である東の方角から強い力が働いている。

東とは光の来る方角である。あなたは言う。

「沈黙のうちに働き、沈黙のみが表しうる宇宙の主の御前にて、

わが自由意志により、おごそかに誓わん。この日より、大いなる業に向かいて、

わが霊的性質を浄化し、向上せしめる径を進み、人間の理を越えて、

やがては高次の天才なる領域に辿りつかん。

われはまた、おごそかに誓えり、魔術の力を悪しき業に用いることなきを。

われはひたすら、霊的向上と奉仕のために古代の業を学べり。

この誓いを違えることあらば、わが武器はわれを害し、わが魔術は無に帰すべし。

(両手を真横に広げ、薔薇の十字架を肉体で模擬する。)

宇宙の主の御前にて、この誓いを奉納す。

聖なるかな、汝、宇宙の主よ。

聖なるかな、汝、自然の造らざるものよ。

聖なるかな、汝、広大にして強大なるものよ。

光と闇の主よ。」

小五芒星の追儼儀式を行う。

学習参考図書

次の書籍が魔術史の理解を深めるために非常に参考になる。

- リチャード・キャベンディッシュ 『魔術の歴史』 河出書房新社、1997年。
- スタンレー・タンバイア 『呪術、科学、宗教—人類学における「普遍」と「相対」』 思文閣出版、1996年。
- キース・トーマス 『宗教と魔術の衰退』 上下 法政大学出版局、1993年。
- 酒井明夫 『魔術と狂気』 勉誠出版、2005年。
- ヴァレリー・フリント 『中世初期の西欧における魔術の勃興』
(未訳： Flint, Valerie I. J. *The Rise of Magic in Early Medieval Europe*.
Princeton : Princeton University Press, 1991.)
- リチャード・キークヘーファー 『中世の魔術』
(未訳： Kieckhefer, Richard. *Magic in the Middle Ages*.
Cambridge : Cambridge University Press, 1989.)
- ニューズナーほか篇 『宗教、科学と魔術の協調と対立』
(未訳： Neusner, Jacob et al. *Religion, Science, and Magic in Concert and in Conflict*.
New York & Oxford : Oxford University Press, 1989.)
- リン・ソーンダイク 『魔術と経験科学の歴史』 全8巻
(未訳： Thorndike, Lynn. *A History of Magic and Experimental Science*. 8 volumes.
New York : Columbia, 1923-1958. 旧版は入手困難、復刻あり。)